

## 高校生の「いじめ認知」に関する実証的研究

藤井 義久\*

(2020年2月14日受理)

Yoshihisa FUJII

A empirical study on "bullying perception" of high school students

### 要約

本研究の目的は、高校生を対象にして、「いじめ深刻指数」という客観的な指標を用いた「いじめ判定」の在り方について検討することである。調査対象者は、公立高校に在籍する生徒（1～3年）275名（男子110名、女子165名）であった。

まず、大学生を対象に実施した予備調査によって収集された「いじめ」と疑われる45個のスクールライフイベントごとに、それぞれ精神的苦痛度と心的外傷度について回答を求め、その合計点を「いじめ深刻得点」とした。そして、45個の「いじめ深刻得点」の全体平均値に基づき、各スクールライフイベントごとの「いじめ深刻得点」をそれぞれ偏差値に換算した値である「いじめ深刻指数」を「いじめ判定」の客観的基準とすることにした。その結果、「いじめ深刻指数」が最も高かったスクールライフイベントは、「友達に自分が大切にしている物を盗まれた」(72)であった。また、45個の「いじめ深刻指数」を用いて、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、最終的に「精神的攻撃」、「人権侵害」、「物的攻撃」、「身体的攻撃」という4つの下位尺度、計30項目から成る「高校生版いじめ認知尺度」が開発された。なお、本尺度の信頼性については、クロンバックの $\alpha$ 係数から、妥当性については「うつ傾向」との関連性から、それぞれ確認された。

さらに、過去1か月以内に経験したスクールライフイベントそれぞれの「いじめ深刻指数」を単純に合算した値である「いじめ認知得点」と「うつ得点」との関係について回帰分析を行ったところ、 $y=9.12x-40.28$  ( $x$ : うつ得点,  $y$ : いじめ認知得点) という正の回帰直線が得られた。そこで、この回帰直線を用いて、高校生における「いじめ認知得点」のカットオフポイントを求めたところ、105点となった。このカットオフポイントである105点が、今後、「被害者判断」でもあり「第三者判断」でもある「いじめ判定」を行う1つの客観的基準になることを明らかにした。

### はじめに

我が国において、「いじめ」は社会問題化しており、2011年に滋賀県大津市で発生した重大な中学2年生いじめ自殺問題以降、文部科学省を初め、

各自治体、教育委員会、学校は様々な取り組みを行ってきた。そのような「いじめ対策」が国を挙げて推進されるきっかけとなったのは、文部科学省(2013)が「いじめ」への対応と防止について

\*岩手大学教育学部

学校や行政等の責務を規定した「いじめ防止対策推進法」を施行したことに端を発する。「いじめ防止対策推進法」が施行されたことに伴い、「いじめ」は、「児童生徒に対して、当該児童生徒が在籍する学校に在籍している等当該児童生徒と一定の人的関係のある他の児童生徒が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって当該行為の対象となった児童生徒が心身の苦痛を感じているもの。」と定義され、これらの規定に基づいて、各自治体や学校は、いじめの早期発見、早期対応、いじめ防止対策に努めることとなった。

しかし、依然として「いじめ」は、日本全国の学校において起こり続けている。その原因の1つとして、児童生徒の主観に基づいた「いじめ判定」の難しさが挙げられる。文部科学省は2006年にいじめの定義を変更し、それから学校現場では「いじめ」に当たるかどうかは児童生徒本人が苦痛を感じたかどうか、いわゆる被害者の主観的判断に委ねられる方法に改められた。確かに、児童生徒の視点からいじめを捉えることはいじめの芽を摘み取るためにも非常に重要なことと言える。しかし、その一方で、児童生徒のいじめの「感じやすさ」には個人差が存在し、友人との些細なトラブルでさえも苦痛として感じ、すぐに周りの大人たちに報告してしまう子もいるのが事実である。そのような場合、学校側が「いじめ」だと即認定、即介入してしまうと、学校現場において児童生徒の社会的スキルを学ぶ大切な機会を減少させてしまうことにつながりかねない。また、被害者の主観に基づいて多くの「いじめ認知件数」が報告されるようになると、本当に即介入、阻止しなければならない「いじめ」のケースが埋もれてしまう恐れも否定できない。このように「いじめ判定」の基準が基本的に被害者の主観的判断に委ねられたことによって、どこまでを「いじめ」として扱えば良いのか、また早急に介入すべき事態なのかを判断することが難しいという声が学校現場からも多く聞こえるようになってきた。また、定義の変更により、被害者の訴えが重んじられることになっ

たため、日頃から児童生徒の声によく耳を傾けているかどうか、各県の教育委員会が報告する「いじめ認知件数」に少なからず影響を与えているものと考えられる。

さて、そのような現在の「いじめ判定」の在り方に関する問題点が指摘されている中、平成30年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（文科省,2019）によると、平成30年度の「いじめ認知件数」は、小学校が425,844件（前年度317,121件）、中学校が97,704件（前年度80,424件）、高校が17,709件（前年度14,789件）、特別支援学校2,676件（前年度2,044件）、全体では543,933件と、前年度より大幅増の過去最高を記録した。この結果は、各学校において「いじめ防止対策」が進み、文科省の「いじめの定義」の趣旨に則り、「いじめ」の芽を摘み取るために児童生徒の声を日頃から聞き取ろうとする学校側の努力の現れの結果であると捉えることもできる。しかし、その一方で、都道府県別1000人当たりの「いじめ認知件数」では、最少の佐賀県が9.7件、最多の宮崎県が101.3件と実に10倍以上の格差がある。同じ九州の県でこれほど「いじめ認知件数」に差があるとは考えにくい。同様のことが、大阪の1000人当たりの「いじめ認知件数」が39.1件であるのに対し、お隣の京都府が91.7件といった具合に、近畿地方でも生じている。つまり、現在、文科省が発表している「いじめ認知件数」は、いじめの実態を表しているのではなく、むしろ児童生徒の声に日頃からよく耳を傾けているかなど、「いじめ防止」に積極的に取り組んでいる県であるかどうかを示す指標にすぎないと考えられる。従って、今後、「いじめ認知件数」に代わる、「いじめの実態」を正確に表す客観的指標の開発がぜひとも必要であると考え、文科省の「いじめの定義」に則り、「被害者判断」でもあり「第三者判断」でもある客観的な「いじめ判定」を可能にする「いじめ深刻指数」の算出を試みることにした。

そこで、改めて学校における「いじめ認知」の難しさについて考えたい。前にも述べた通り、文

科省が毎年発表している「いじめ認知件数」は、あくまで児童生徒の声をどこまでよく聞いているかに依存している傾向が強いため、実際に発生しているいじめの数とは異なっている可能性が高い。江原・木村（2010）は拒否的態度によるいじめはふざけとの区別が難しいこと、そしていじめ行為のごまかしやその隠ぺいが、加害者だけでなく被害者や傍観者も含めて行われる可能性があることを指摘している。また、森田（2010）も被害者と加害者がいじめと見なしていても、教師がいじめと判断せず問題として取り合わないこともあるといったいじめ認識のズレがいじめの見えにくさにつながっていると述べている。さらに、津田（2011）が行った調査によると、男性よりも女性の方が被害妄想に伴う感情が強いことが確認されていることから、被害者の訴えをそのまま鵜呑みにすることも危険である。このように、現代のいじめはその「見えにくさ」が大きな特徴となっており、今もなお進行形でいじめの苦しみを被っている多くの児童生徒たちがいることが考えられる。また、近年ではいじめを理由とした自殺や不登校が後を絶たない状況が続いており、岩手県内においても、平成27年に中学生が同級生によるいじめを理由として自ら命を絶つという痛ましい事件も起きている。

従って、従来のいじめアンケートに基づく早期発見、早期対応だけではいじめ問題に歯止めをかけることは限界にきているのではないかと考えられる。確かに、アンケート調査を定期的に行ったり、校内研修の充実を図ったりすることはいじめの早期発見・早期対応においては重要な役割を果たしているかもしれない。しかし、いじめ増加の現状から見ても、今日の学校現場におけるいじめが起きてからの教師主体の対応、言わば「後手の対応」だけではいじめを防止すること難しいだろう。この問題を解決するために、これからは児童生徒自身をいじめ問題解決の主体として育てて未然防止を図っていく、言わば「先手の対応」に重点を置くべきであると感じる。そのためには、いじめの未然防止に力を入れて取り組んでいる北欧

諸国のように、学校教育の早期の段階から児童生徒が主体的にいじめに向き合い、個々人にいじめをしない、させない、止めさせる力、すなわち「いじめ防止能力」を育むことが即急に取り組むべき課題になるのではないかと考えられた。本間（2003）はいじめを構成する要因や原因に注目するよりも、いじめに対してどのように対処するかを明らかにして、いじめ被害者への有効な対応策を見出そうとする研究の有用性を指摘している。松本ら（2013）は教師が個別に対応を行っている今日の学校現場において、教師主体による個別対応だけではいじめの未然防止は難しいため、今後は児童生徒が主体となっていじめを未然防止するための取り組みが求められると述べている。また、森田（2010）もいじめを個人の問題だけとせず、学校社会の問題として「公共化」させる力を児童生徒に身に付けさせ、自分たちの手で課題を解決するよう、主体的に参画させていくべきだと主張している。

従って、今後、教師や関係機関主体ではなく、子ども主体の「いじめ防止対策」を大いに推し進めていく必要があると考えられる。そのためには、まずは、子ども自身が主体的に「いじめ防止対策」を推し進めていけるよう、いじめの深刻な状況を自ら把握できるアセスメントツールの開発がぜひとも急がれるところである。そこで、本研究では、子ども主体の「いじめ防止対策」の中核を成す「いじめ防止教育」においても活用できる「高校生版いじめ認知尺度」の開発を目指すことにした。

## 研究 1

### 1 目的

小学校、中学校、高校において、「いじめ」と疑われるスクールライフイベントについて明らかにすることを目的とする。

### 2 方法

#### (1) 調査対象

大学生（1～2年）161名（男性75名、女性86名）を対象とした。

## (2) 調査手続

講義時間中、大学教員によって、自分が通った小学校、中学校、高校を振り返って、「いじめ」に当たると思われる出来事について、思いつくまま、いくつでも答えてください」と質問する形で自由記述調査を実施した。なお、調査に当たっては、倫理的配慮から、「答えたくない場合は答えなくてもよいこと」、「自分の回答が他人に知られることは決してないこと」、「回答によって不利益を被ることはない」ということを口頭及び文書で伝えた。

## 3 結果

前述の手続きにより実施された自由記述調査によって収集された回答について、KJ法を用いて類似した回答を整理しまとめたところ、「いじめ」と疑われるスクールライフイベントは、大きく5つのカテゴリーに分類された。すなわち、KJ法によって明らかになった5つのカテゴリーとは、「言語的攻撃」、「身体的攻撃」、「物的攻撃」、「精神的攻撃」、「人権侵害行為」である。そこで、それぞれのカテゴリーごとに、内容的妥当性の観点から、「いじめ」と疑われるスクールライフイベントに関する項目を9項目ずつ、計45項目抽出し、研究2で用いることにした。

## 研究2

### 1 目的

「被害者判断」でもあり「第三者判断」でもある「いじめ判定」の客観的基準となる「いじめ深刻指数」を用いた「いじめ認知」の在り方について検討することを目的とする。

### 2 方法

#### (1) 対象

東北地方の公立高校3校（普通科2校、商業科1校）に在籍している生徒（1～3年生）、計275名（男子110名、女子165名）を対象にした。なお、学年別内訳は、1年生104名、2年生92名、3年生89名である。

#### (2) 調査手続

まず、調査対象校の学校長と教務主任、そして

学級担任に口頭及び文章で本研究の趣旨と質問紙内容について説明した。調査は、授業時間を使って、担任が以下の調査内容から成る質問紙を一斉に調査対象者に配布し、回答終了後、直ちに質問紙を回収する方式で実施された。なお、質問紙は無記名とするとともに、「成績に全く関係のないこと」、「自分の答えが先生や友達に知られることはないこと」、「答えたくない質問に対しては、答えなくてもよいこと」など、口頭および文書で調査対象者に予め伝えておくことによって、倫理的配慮の徹底を図った。

#### (3) 調査内容

調査内容は、以下の通りである。

##### A. フェイスシート

調査対象者の性、学年について尋ねた。

##### B. 高校生版いじめ認知尺度（暫定版）

研究1において実施した自由記述調査結果をもとにして作成した、「いじめ」と疑われるスクールライフイベントに関する45項目から成る尺度を新たに作成した。そして、それぞれの項目に対して、「精神的苦痛度」と「心的外傷度」、それぞれ独立に回答を求めた。すなわち、「精神的苦痛度」に関しては、「あなたは、次のような時、辛い気持ちになりますか」と質問し、5件法（全く辛くないー非常に辛い）で回答を求めた。一方、「心的外傷度」に関しては、「あなたは次のような時、心が傷つきますか」と教示し、5件法（全く傷つかないー非常に傷つく）で回答を求めた。

##### C. 高校生版いじめ経験尺度

(2)と同じ「いじめ」と疑われる可能性のあるスクールライフイベントに関する45項目を提示して、「あなたは、過去1か月以内に、次のようなことを経験しましたか」と教示し、それぞれのスクールライフイベントごとに2件法（経験していないー経験した）で回答を求めた。

##### D. 児童用抑うつ自己評価尺度

Birleson (1991) が開発した「児童用抑うつ自己評価尺度」(Depression Self-Rating Scale for Children) を村田ら (1996) によって日本版にした18項目を用いた。本尺度は、もともと7歳から13歳

を対象としているが、永井（2008）が述べているように、広く児童期から思春期を対象として使用可能な尺度とされているため、高校生を対象とした本研究においても実施可能と判断し、用いることにした。なお、回答方法は、3件法（いつもそうだ、ときどきそうだ、そんなことはない）である。そして、各回答に対して、うつ傾向が強いと思われる回答から順に、0点から2点という得点を与え、それぞれの得点を合算する形で「うつ得点」を算出する。従って、「うつ得点」の範囲は0点から36点ということになる。なお、うつ傾向が強いかどうかの判断の基準となるカットオフポイントは16点である。

#### (4) 分析方法

分析に当たっては統計パッケージである SAS を用いた。

### 3 結果

#### (1) スクールライフイベントごとの「いじめ深刻指数」と「経験率」について

まず、「いじめ」と疑われる可能性のあるスクールライフイベントに関する45項目に対する各回答（精神的苦痛度と心的外傷度）にそれぞれ得点を与えた。具体的には、「精神的苦痛度」に関する回答に対しては、「全く辛くない」に0点、「あまり辛くない」に1点、「どちらとも言えない」に2点、「かなり辛い」に3点、「非常に辛い」に4点という得点を与えた。一方、「心的外傷度」に関する回答に対しては、「全く傷つかない」に0点、「あまり傷つかない」に1点、「どちらとも言えない」に2点、「かなり傷つく」に3点、「非常に傷つく」に4点という得点を与えた。

次に、45個のスクールライフイベントごとに「精神的苦痛度得点」（0点～4点）と「心的外傷度得点」（0点～4点）を単純に合算した値を「いじめ深刻得点」（0点～8点）とし、各スクールライフイベントに対する「いじめ深刻得点」の平均値および標準偏差を算出した。次に、45個のスクールライフイベントごとに算出された「いじめ深刻得点」全体の平均値及び標準偏差を求めた。

その結果、45個の「いじめ深刻得点」の平均値は4.26、標準偏差は0.45であったので、それらの値を用いて、各スクールライフイベントごとの「いじめ深刻得点」を偏差値に換算することによって「いじめ深刻指数」を求めた。従って、「いじめ深刻指数」の平均値は50ということになり、50を超えてその値が大きいスクールライフイベントほど、子どもに精神的ダメージを与える可能性が強い、深刻な「いじめ」と疑われる出来事ということができる。

以上の手続きを経て算出された、各スクールライフイベントごとの「いじめ深刻指数」を Table 1 に示す。それによると、45個のスクールライフイベントのうち「いじめ深刻指数」が最も高かった出来事は、「友達に自分の大切にしている物を盗まれた」（72）、次に高かった出来事は「クラスで仲間外れにされた」（68）であった。これらの出来事は、多くの高校生にとって、特に深刻な精神的ダメージを与える可能性が高い「いじめ」と疑われる出来事と言える。一方、「いじめ深刻指数」が最も低かった出来事は、「友達との話し合いで自分の意見が通らなかった」（20）、次に低かった出来事は「友達がわざと自分にぶつかってきた」（34）であった。これらの出来事は、多くの高校生にとって、たとえそのような出来事を経験したとしても、一般に深刻な精神的ダメージを与える可能性が低い出来事と言える。

さらに各スクールライフイベントごとに、「いじめ深刻指数」とあわせて、過去1か月以内にそれぞれの出来事を経験したことがあるか、実際の経験率についても Table 1 に示した。それによると、高校生において過去1か月以内の経験率が最も高かった出来事は、「友達が自分の意見を聞いてくれなかった」（18.48%）、次に高かった出来事は、「友達から避けられているような感じがした」（17.39%）であった。

#### (2) 高校生版いじめ認知尺度の開発

(1) の手続に基づいて算出した「いじめ深刻指数」を用いて、「いじめ」と疑われる可能性のある45個のスクールライフイベントについて主因子

Table 1 スクールライフイベントごとの「いじめ深刻指数」と経験率

|                                  | 深刻指数 | 経験率   |
|----------------------------------|------|-------|
| (1) 友達に自分の大切にしている物を盗まれた。         | 72   | 3.27  |
| (2) クラスで仲間外れにされた。                | 68   | 0.01  |
| (3) 下駄箱の靴がなくなっていた。               | 67   | 0.01  |
| (4) 友達に嫌だと思ふことを繰り返された。           | 66   | 0.04  |
| (5) 友達が陰でこそこそ自分の悪口を言っていた。        | 63   | 3.62  |
| (6) 友達から避けられているような感じがした。         | 60   | 17.39 |
| (6) 友達に自分の物を隠された。                | 60   | 2.54  |
| (8) 友達に、事実でない噂を広められた。            | 59   | 6.52  |
| (8) 友達に無視された。                    | 59   | 5.80  |
| (10) 親しくしていた友達が急に冷たくなった。         | 58   | 9.06  |
| (10) 友達に悪口を言われた。                 | 58   | 15.58 |
| (12) 友達に嫌なことを言われた。               | 57   | 10.87 |
| (12) 友達が人に見られたくない自分の物を勝手に見た。     | 57   | 2.17  |
| (12) 友達が自分の物を壊された。               | 57   | 3.62  |
| (12) 友達に嫌なことをさせられた。              | 57   | 9.78  |
| (16) 友達に「止めて」と言っても止めてくれないことがあった。 | 56   | 4.71  |
| (17) この頃、親しかった友達が話しかけてくれなくなった。   | 55   | 5.07  |
| (18) 助けてほしい時に友達が助けてくれなかった。       | 53   | 3.99  |
| (19) 友達に自分が気にしていることを言われた。        | 51   | 13.77 |
| (19) 友達にわざとボールをぶつけられた。           | 51   | 1.45  |
| (21) 授業中、私の方を見て、こそこそ話をしている友達を見た。 | 50   | 2.90  |
| (21) 友達に殴られた。                    | 50   | 2.54  |
| (21) 友達は私の話を全然聞いてくれなかった。         | 50   | 3.99  |
| (24) 友達に文句を言われた。                 | 48   | 14.49 |
| (24) 友達に話しかけると嫌な顔をされた。           | 48   | 5.43  |
| (24) 友達に蹴られた。                    | 48   | 2.90  |
| (24) 友達に冷たい顔をされた。                | 48   | 6.52  |
| (28) 友達に髪の毛を引っ張られた。              | 47   | 1.45  |
| (28) 一生懸命やっているのに、友達からやかましく注意された。 | 47   | 2.90  |
| (28) ありもしないことを友達に疑われた。           | 47   | 5.80  |
| (31) 自分の失敗をクラスの人に笑われた。           | 46   | 0.01  |
| (32) 好きな人のことを友達にばらされた。           | 44   | 2.17  |
| (32) 友達に脅された。                    | 44   | 3.62  |
| (34) 友達に挨拶しても返事してくれなかった。         | 43   | 4.35  |
| (35) 友達に命令されている気分になった。           | 41   | 6.16  |
| (35) クラスでいつもひとりぼっちのような気がする。      | 41   | 5.80  |
| (35) 友達に班の仕事を無理やりやらされた。          | 41   | 0.01  |
| (35) 自分の発表に対して、クラスの人に笑われた。       | 41   | 4.34  |
| (39) 友達に馬鹿にされた。                  | 41   | 13.04 |
| (40) 友達にたたかれた。                   | 40   | 7.61  |
| (40) 友達に変なあだ名をつけられた。             | 40   | 6.89  |
| (42) 友達が自分の意見を聞いてくれなかった。         | 39   | 18.48 |
| (43) 友達にからかわれた。                  | 37   | 12.68 |
| (44) 友達がわざと自分にぶつかってきた。           | 34   | 2.53  |
| (45) 友達との話し合いで自分の意見が通らなかった。      | 20   | 7.61  |

( ) 内の数値は、「いじめ深刻指数」の順位である。

法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、4因子解が妥当であると判断された。ただ因子負荷量が低い項目、二重負荷を示した項目が見られたため、それらの項目を除いて、再度同様の因子分析を繰り返し行った結果、最終的にTable 2のような因子分析結果を得た。なお、各項目の( )内は、「いじめ深刻指数」の値である。

まず、第1因子は、「友達に文句を言われた」(48)、「友達に事実でない噂を広められた」(59)、「友達に自分の気にしていることを言われた」(59)といった、友達から言葉で攻撃される行為に関する項目に高い因子負荷が見られた。そこで、これら6項目をまとめて「言語的攻撃因子」と命名した。

第2因子は、「自分の失敗をクラスみんなに笑われた」(49)、「自分の発表に対して、クラスみんなに笑われた」(40)、「友達にからかわれた」(38)といった、友達から精神的ダメージを与えられる行為に関する項目に高い因子負荷が見られた。そこで、これら11項目をまとめて「精神的攻撃因子」と命名した。

第3因子は、「友達に自分の大切にしている物を盗まれた」(72)、「下駄箱の靴がなくなっていた」(67)、「友達に自分の物を壊された」(57)といった、友達から自分の所有物を攻撃される行為に関する項目に高い因子負荷が見られた。そこで、これら8項目をまとめて「物的攻撃因子」と命名した。

第4因子は、「友達にたたかかれた」(40)、「友達に蹴られた」(48)、「友達に殴られた」(50)といった、友達から身体的危害を加えられる行為に関する項目に高い因子負荷が見られた。そこで、これら5項目をまとめて、「身体的攻撃因子」と命名した。

以上の手続きを経て、最終的に4つの下位尺度、計40項目から成る「高校生版いじめ認知尺度」を開発した。そして、今後、「いじめ判定」の客観的基準となる「いじめ認知得点」は、過去1か月以内に経験した各スクールライフイベントに付記されている「いじめ深刻指数」を単純に合算す

る形で算出することにした。なお、これら4つの因子間の相関係数は、Table 2にあわせて示した。それによると、すべての下位尺度間において、.57から.73とやや高い相関が認められた。

また、尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、「言語的攻撃」が.93、「精神的攻撃」が.93、「物的攻撃」が.92、「身体的攻撃」が.93、全体でも.89という高い値を示した。これらの結果から、本尺度には、一定の信頼性が備わっていることが明らかになった。

### (3) 認知得点の性差および学年差について

過去1か月以内に経験した各スクールライフイベントに付記されている「いじめ深刻指数」を単純に合算する形で算出された「いじめ認知得点」の性差と学年差を検討するために、二要因分散分析(性×学年)を行った。その結果をTable 3に示す。それによると、「いじめ認知得点」(全体)においては、有意な性差も学年差も認められなかった。その一方で、「高校生版いじめ認知尺度」の下位尺度ごとに見ると、「身体的攻撃」において1%水準で有意な性差(男子>女子)が、「精神的攻撃」において5%水準で有意な学年差が認められた。そこでさらに、有意な学年差が確認された「精神的攻撃」について、Tukeyの多重比較を行った結果、1年生の「いじめ認知得点」が2、3年生よりも5%水準で有意に高いことが確認された。

### (4) いじめ認知得点とうつ得点との関係について

今後、本研究において開発した「高校生版いじめ認知尺度」を用いて、客観的な「いじめ判定」を行っていくためには、過去1か月以内に経験したスクールライフイベントそれぞれの「いじめ深刻指数」を単純に合算した値である「いじめ認知得点」が何点以上になると精神的に深刻な「いじめ状況」と判断されるのか、その基準を明確にしておく必要がある。すなわち、精神的に深刻な「いじめ状態」と判断される基準、いわゆる「高校生版いじめ認知尺度」のカットオフポイントを求めることにした。具体的には、まず、「いじめ認知得点」を目的変数、「うつ得点」を説明変数とし

て回帰分析を行ったところ、 $y=9.12x - 40.28$  ( $x$ : うつ得点,  $y$ : いじめ認知得点) という正の回帰直線が得られた。この回帰直線の  $x$  のところに、「児童用抑うつ自己評価尺度」のカットオフポイントである16点を代入することにより、「高校生版いじめ認知尺度」のカットオフポイントを求めた。その結果、高校生における「いじめ認知得点」のカットオフポイントは、105点となった。つまり、高校生が過去1か月以内に経験した「いじめ」と疑われる出来事それぞれに付与されている「いじめ深刻指数」の合計が105点を超えると、現在、精神的に深刻な「いじめ」を受けている可能性が高いと判断される。

### 考察

学校において、「いじめ」と疑われる同じ出来事を経験しても、生徒によって自ずから感じ方は異なる。それにも関わらず、現在、各学校においては、被害者の主観的な精神的苦痛に重きを置いた「いじめ判定」が行われている。すなわち、被害者から精神的苦痛の訴えがあれば、程度の如何に関わらず「いじめ」と判断することになっている。その結果、「いじめ認知件数」も、児童生徒の訴えをよく聞くかどうかによって、自治体間の「いじめ認知件数」の格差が大きくなってきており、いじめの実態を正確に把握できない状況になっている。それに加えて、「いじめ認知件数」という量的指標のみに注目して「いじめの実態」を分析しようとする、深刻な「いじめ」と軽微な「いじめ」を同等に扱うことになり、本来、早急に対応しなければならない深刻ないじめのケースが膨大な「いじめ認知件数」の中に埋もれてしまう恐れが強くなることが懸念される。そこで、本研究では、高校生を対象にして、文科省の「いじめ」の定義に基づき、「被害者判断」でもあり「第三者判断」でもある「客観的いじめ判定」を可能にする「高校生版いじめ認知尺度」の開発に取り組むことにした。

まず、「いじめ」と疑われる各スクールライフイベントごとに、一般的にどのくらい精神的苦痛

度を与える可能性が相対的に高いかを示す客観的指標である「いじめ深刻指数」を算出した。具体的には、各スクールライフイベントごとに回答を求めた「いじめ深刻得点」(精神的苦痛度得点+心的外傷度得点)を45個全体の「いじめ深刻得点」の平均値、標準偏差を用いて、偏差値(平均値50, 標準偏差10)に変換する形で算出した。そして、統計的基準に従うと、「いじめ深刻指数」が65以上は精神的ダメージが「極めて大きい」(レベル5), 55以上65未満が「やや大きい」(レベル4), 45以上55未満が平均(レベル3), 35以上45未満が「やや低い」(レベル2), 35未満が「極めて低い」(レベル1)と判断される。その基準に基づき、特に高校生に深刻な精神的ダメージを与える可能性が高いレベル5のスクールライフイベントは、45個中、4個であった。すなわち、「友達に自分が大切にしている物を盗まれた」(指数72), 「クラスで仲間外れにされた」(指数68), 「下駄箱の靴がなくなっていた」(指数67), 「友達に嫌なことを繰り返された」(指数66)の4つが高校生においてレベル5のスクールライフイベントである。すなわち、これらの「友だちに物を盗まれること」や「仲間外れにされること」といったスクールライフイベントは、高校生にとって特に精神的苦痛を感じやすい深刻な「いじめ」に当たる出来事と考えられる。しかしながら、これらレベル5の深刻な「いじめ」に当たる出来事の実験率は、0.01~3.27%と極めて低かった。従って、レベル5の精神的イメージが極めて大きいと判断されるスクールライフイベントを経験する高校生は殆どいないことが明らかになった。むしろ、精神的ダメージがレベル4の「友達から避けられているような感じがした」(指数60), 「友達に悪口を言われた」(指数58)といったスクールライフイベントの実験率が15%以上となっていることに注目しておく必要がある。つまり、日頃、これらのレベル4のスクールライフイベントを経験する高校生は潜在的に多くいると考えられ、そういった経験が積み重なるとかなり精神的ダメージが大きくなる可能性が高いので、そういった出来事を



Table 2 高校生版いじめ認知尺度の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

| 項 目                                | F 1  | F 2  | F 3    | F 4    |        |
|------------------------------------|------|------|--------|--------|--------|
| <b>I 言語的攻撃</b>                     |      |      |        |        |        |
| 7 友達に文句を言われた。(48)                  | .52  | .35  | -.14   | .28    |        |
| 17 友達に事実でない噂を広められた。(59)            | .50  | .16  | .22    | .12    |        |
| 14 友達に自分の気にしていることを言われた。(52)        | .50  | .21  | .33    | -.02   |        |
| 20 友達に挨拶しても返事してくれなかった。(43)         | .48  | .25  | -.10   | .38    |        |
| 38 友達は私の話を全然聞いてくれようとしなかった。(50)     | .45  | .29  | .19    | .11    |        |
| 1 友達が自分の意見を聞いてくれなかった。(39)          | .41  | .22  | .31    | .11    |        |
| <b>II 精神的攻撃</b>                    |      |      |        |        |        |
| 43 自分の失敗をクラスのみんなに笑われた。(47)         | .03  | .75  | .22    | -.03   |        |
| 5 自分の発表に対して、クラスのみんなに笑われた。(40)      | -.01 | .74  | .19    | .05    |        |
| 28 友達にからかわれた。(38)                  | .03  | .73  | .02    | .23    |        |
| 13 友達に馬鹿にされた。(44)                  | .14  | .63  | .13    | .13    |        |
| 34 好きな人のことを友達にばらされた。(48)           | .24  | .61  | .07    | .10    |        |
| 32 友達に班の仕事を無理やりやらされた。(39)          | .17  | .61  | .11    | .11    |        |
| 31 クラスではいつもひとりぼっちのような気がする。(48)     | .31  | .61  | .04    | .04    |        |
| 25 一生懸命やっているのに、友達からやかましく注意された。(49) | .31  | .56  | .10    | .06    |        |
| 10 友達に変なあだ名をつけられた。(35)             | .01  | .54  | .29    | .10    |        |
| 41 友達に命令されている気分になった。(44)           | .21  | .51  | .04    | .37    |        |
| 37 ありもしないことを友達に疑われた。(50)           | .20  | .42  | .29    | .18    |        |
| <b>III 物的攻撃</b>                    |      |      |        |        |        |
| 3 友達に自分の大切にしている物を盗まれた。(72)         | .19  | -.11 | .82    | .08    |        |
| 42 下駄箱の靴がなくなっていた。(67)              | .21  | .06  | .76    | .03    |        |
| 45 友達に自分の物を壊された。(57)               | -.00 | .14  | .73    | .13    |        |
| 9 友達に自分の物を隠された。(60)                | .30  | .14  | .51    | .00    |        |
| 27 友達に「止めて」と言っても止めてくれなかった。(56)     | .15  | .31  | .50    | .09    |        |
| 36 友達にわざとボールをぶつけられた。(51)           | .09  | .30  | .46    | .12    |        |
| 21 友達に自分が嫌だと思うことを繰り返しやられた。(66)     | .33  | .11  | .46    | .06    |        |
| 6 友達が人に見られたくない物を勝手に見た。(57)         | .36  | .20  | .43    | .09    |        |
| <b>IV 身体的攻撃</b>                    |      |      |        |        |        |
| 18 友達にたたかれた。(40)                   | -.01 | .15  | .24    | .69    |        |
| 12 友達に蹴られた。(48)                    | .04  | .06  | .37    | .60    |        |
| 16 友達に殴られた。(50)                    | .11  | .30  | -.21   | .53    |        |
| 15 友達がわざと自分にぶつかってきた。(34)           | .14  | .38  | .04    | .51    |        |
| 24 友達に脅された。(44)                    | -.06 | .25  | .39    | .50    |        |
|                                    | F 1  | 1.00 | .67*** | .70*** | .57*** |
| 因子間相関                              | F 2  |      | 1.00   | .66*** | .66*** |
|                                    | F 3  |      |        | 1.00   | .73*** |
|                                    | F 4  |      |        |        | 1.00   |

( )内の数値は、いじめ深刻指数の値である。

\*\*\* $p < .001$

多く経験していると答えた高校生に対しては、今後、「いじめ」が深刻化しないよう、教師が必要に応じて早期に介入あるいは支援を行っていくことが必要であると考ええる。

次に、「いじめ深刻指数」を用いて、「いじめ」と疑われる45個のスクールライフイベントについて、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、固有値の変化および解釈可能性から4因子解が妥当であると判断された。ただ二重負荷の見られる項目が複数存在したので、それらの項目を削除して繰り返し因子分析した結果、最終的に「言語的攻撃」、「精神的攻撃」、「物的攻撃」、「身体的攻撃」という4つの下位尺度、計40項目から成る「高校生版いじめ認知尺度」を開発した。つまり、今後、高校における「いじめ」の実態について正確に把握していくためには、本研究において抽出された4つの因子に基づいて多面的に見ていくことが必要であることがわかった。なお、本尺度の信頼性については、クロンバックの $\alpha$ 係

数を算出したところ、下位尺度及び全体とも基準以上の内的整合性が確認されたので、本尺度には一定の信頼性が備わっていることを確認した。その一方で、本尺度の妥当性については、今後、第三者による観察による「いじめチェック」結果と本尺度結果との関連性等について分析することを通して、本尺度の妥当性について確認していくことが必要である。

そして、「高校生版いじめ認知尺度」の各項目には、それぞれ高校生が一般に感じる精神的苦痛度の程度を示す客観的指標である「いじめ深刻指数」が付けられている。この「いじめ深刻指数」を用いることによって、今後は、「被害者判断」でもあり、「第三者判断」でもある「いじめ認知」が可能になるとともに、「いじめ」の深刻度が明らかになることが期待される。具体的には、「あなたは、過去1か月以内に、次のような出来事を経験しましたか」と教示し、「ある」と答えた出来事の「いじめ深刻指数」を単純に合算した値

Table 3 いじめ認知得点の男女別学年別平均値、標準偏差および分散分析結果（性×学年）

|                 | 学年              |                |                 | 分散分析結果（性×学年） |       |      |
|-----------------|-----------------|----------------|-----------------|--------------|-------|------|
|                 | 1年生             | 2年生            | 3年生             | 性            | 学年    | 交互作用 |
| I. 言語的攻撃        | 31.58 (48.40)   | 10.52 (29.16)  | 23.98 (51.27)   | n.s.         | n.s.  | n.s. |
|                 | 24.49 (48.84)   | 21.00 (46.34)  | 21.16 (49.33)   |              |       |      |
| II. 精神的攻撃       | 51.09 (84.47)   | 30.57 (53.22)  | 39.20 (77.18)   | n.s.         | 3.42* | n.s. |
|                 | 40.05 (57.17)   | 16.90 (36.64)  | 24.13 (58.75)   |              |       |      |
| III. 物的攻撃       | 32.26 (70.78)   | 7.39 (26.00)   | 29.61 (80.29)   | n.s.         | n.s.  | n.s. |
|                 | 16.89 (51.58)   | 9.59 (31.03)   | 11.82 (45.07)   |              |       |      |
| IV. 身体的攻撃       | 14.60 (35.39)   | 8.17 (18.30)   | 19.50 (44.28)   | 8.33*        | n.s.  | n.s. |
|                 | 7.31 (18.41)    | 5.59 (15.46)   | 4.22 (13.73)    |              |       |      |
| いじめ認知得点<br>(全体) | 129.53 (219.17) | 56.65 (111.37) | 112.30 (236.17) | n.s.         | n.s.  | n.s. |
|                 | 88.74 (137.28)  | 53.08 (111.28) | 61.33 (139.81)  |              |       |      |

- 注) 1. ( ) 内は、標準偏差である。  
 2. 上段は男子、下段は女子である。  
 3. \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

を「いじめ認知得点」とし、その値が大きくなればなるほど、精神的に深刻な早急な介入が必要である「いじめ」と判断される。Table3に、その「いじめ認知得点」の男女別学年別平均値を、標準偏差および分散分析結果(性×学年)を示しておく。それによると「いじめ認知得点」(全体)では有意な性差、学年差は見られなかったが、「身体的攻撃」において有意な性差が、「精神的攻撃」において有意な学年差が、それぞれ確認された。

そこで、本研究では、さらに、過去1か月以内の「いじめ認知得点」が何点以上になると早急に介入しなければならない深刻な「いじめ」と判断されるのか、その客観的基準となるカットオフポイントもあわせて求めておくことにした。具体的には、目的変数を「うつ得点」、説明変数を「いじめ認知得点」として回帰分析を行った結果、 $y = 9.12x - 40.28$  (x: うつ得点, y: いじめ認知得点)という正の回帰直線が得られた。すなわち、「うつ得点」と「いじめ認知得点」との間には正の関連のあることがわかった。そこで、「うつ得点」のカットオフポイントである16点を回帰分析によって得られた前述の回帰直線のxに代入したところ、105点という値を得た。この105点という「いじめ認知得点」のカットオフポイントが、今後、「被害者判断」でもあり「第三者判断」でもある「客観的ないじめ判定」を可能にする客観的基準となることが期待される。すなわち、過去1か月以内の「いじめ深刻指数」を単純に合算した値である「いじめ認知得点」が105点を超えると、「うつ」になるぐらい、日々の出来事によって精神的ダメージを大きく受けている「深刻ないじめ状態」にある可能性が高いと判断される。カットオフポイントが105点という点、必ずしも大きな値とは言えない。藤井(2018)が行った小学生調査におけるカットオフポイント205点、藤井(2019)が行った中学生調査におけるカットオフポイント505点と比べて極めて低い値である。文部科学省(2019)の調査からも明らかなように、一般に高校における「いじめ認知件数」は小中学校に比べてかなり少ないことから、高校において「いじめ」の発生

頻度は比較的少ないと推測される。そのような状況の中においては、「いじめ」と疑われる出来事を2つ、3つ経験するだけでも、精神的ダメージは大きく、早急に介入、支援していかなければならないレベルになってしまうものと考えられる。

今後は、本研究で開発した「高校生版いじめ認知尺度」を用いて、「いじめ経験度」(頻度)と「いじめ深刻度」(程度)の両面から、「いじめ」によって心が傷ついている生徒を早期に発見するとともに、学級における「いじめ」の実態について多面的にアセスメントすることを通して、「いじめ」のない学級作りに当たっていく必要があると考える。

## 付記

本研究は、平成28～31年度科学研究費補助金(基盤研究C)「いじめの認知とその防止に関する総合的研究—いじめ防止能力の育成に着目して」(研究代表者：藤井義久)の助成を受けて実施された。

## 引用文献

- Birleson, P. 1981 The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self rating scale: A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 22, 73-88.
- 江原稔・木村裕 2010 いじめの不可視性に関する要因について 教師不在・介在場面における振る舞いの相違に着目して, 日本教育心理学会総会発表論文集, 52, 389-390
- 藤井義久 2018 小学校における「いじめ認知」における客観的評価基準の検討—「いじめ深刻指数」導入の試み, 岩手大学大学院教育学研究科紀要, 2, 171-182.
- 藤井義久 2019 「中学生版いじめ認知尺度」の開発とその信頼性, 妥当性の検討, 岩手大学大学院教育学研究科紀要, 3, 259-270.
- 本間友巳 2003 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への適応, 教育心理学研究, 51, 390-400

- 津田恭充 2011 被害妄想に伴う感情を測定する  
尺度の開発, パーソナリティ研究, 19-3,  
245-254
- 松本剛他 2013 いじめ予防を目的とした授業プ  
ログラムの研究, 平成25・26年度「理論と実  
践の融合」に関する共同研究活動成果報告書
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 1996  
学校における子どものうつ病—Birleson の小  
児うつ病スケールからの検討— 最新精神医  
学,1,131-138.
- 文部科学省 2013 いじめ防止対策推進法  
([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302904.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302904.htm))
- 文部科学省 2019 平成30年度「児童生徒の問題  
行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する  
調査」結果(速報値)  
([https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/31/10/1422020.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/10/1422020.htm))
- 森田洋司 2010 いじめとは何か 教室の問題、  
社会の問題, 中公新書
- 永井 智 2008 中学生における児童用抑うつ自  
己評価尺度(DSRS)の因子モデルおよび標  
準データの検討 感情心理学研究,162,133-  
140.